週刊読書人
1989年〔平成元年〕12月11日（月曜日）

1989-29 1/1

日本ポピュラー音楽学会準備会の旗上げ

橋爪大三郎

ポピュラー音楽をこよなく愛し、音楽や音と社会の繋がりに思いをいたす人。方法論をもって捉えていこうとする人。これら音楽に関心を持つ人びとの会、日本ポピュラー音楽学会準備会の第一回大会が去る11月5日、東京芸術大学で開催された。研究対象が従来の学界の枠組とは異質なため、参加者も学者、研究者とは限らず、ユニークな会員構成となっている。ここでは、同会の会員であり事務局を担当している東京工業大学助教授の橋爪大三郎氏に、同会の設立過程および趣旨について執筆してもらった。（編集部）

去る11月5日「日本ポピュラー音楽学会準備会」の第一回大会が開かれた。会場は上野の、東京芸術大学音楽学部。全国からポピュラー音楽研究に並々ならぬ関心を寄せる60余名が参加、盛会だった。たまたま事務局を仰せつかっていることでもあり、この学会の活動についてお報せし、広く関心をお持ちの人びとに参加を呼びかけたい。

なぜ、いま、ポピュラー音楽なのか●

なぜいまポピュラー音楽なのか。――時代のもたらす変化の波が、ポピュラー音楽を、主役の座に押上げている。

まず、クラシック音楽の閉塞・解体。M・ヴェーバーが描いたように、西洋の調性音楽は、合理化のプロセスをたどり尽くし、とうとう発展の可能性がなくなってしまったように見える。一方で「雑音」が見直され、コンサートホールの外に拡がる日常的な音の世界にこそ耳を傾けるべきだ、と主張する人びとも現れた。ヨーロッパ世界が構築した音の世界が、まさに脱構築を迫られているのである。

第二に、ポピュラー音楽のクロス・オーバー現象。ジャズ、ロック、歌謡曲、アイドル・ポップ……といったジャンルの垣根がますますあやふやになり、互いに浸透しあって、渾然一体の世界を形づくっている。ここにも時代の無意識が反映されているに違いない。ポピュラー音楽を抜きにしては、現代文化を語りえない、と言えるだろう。

第三に、エスニック志向の高まり。先進国の音楽が、どれも似たりよったりで単調に聴こえるようになったことの裏返しなのか、民族社会のローカルなサウンドが、耳の肥えた人びとの関心を集めるようになった。情報が地球の裏側までゆきわたり、音と音楽が世界の共有財産になりつつある、ということである。

第四に、音の複製技術が、ベンヤミンの時代とはくらべものにならないほど、われわれの音環境を変えてしまった。ラジカセ、ウォークマン、CD、LD、……。聴取のあり方も、そうした機器の普及につれて変容し、ライフ・スタイルのなかに溶けこんでいる。いまや音楽なしの日常生活など考えられない。

このように、音と音楽のあり方は、めざましい変貌をとげてきた。これをじっくり追いかければ、われわれの社会の現在を摑むことができるのではないか。

ポピュラー音楽研究に新しい風

めざましい変貌をとげてきた音と音楽

国際組織でなく日本国内の学会と●

ポピュラー音楽のまじめな「研究」は、日本よりもひと足さきに、海の向こうでスタートした。一九八一年に、ヨーロッパ、アメリカの人びとが中心になって、ポピュラー音楽研究の国際組織、IASPM（国際ポピュラー音楽学会）が設立された。本部はスウェーデンに置かれている。以後、二年に一度世界大会を開いており、今年はパリで第5回大会が開かれた。メンバーは現在、世界三十数ヶ国から総勢約六百人であるという。

この学会の日本支部が設立されたのが、一昨年のこと。早くからIASPMで活躍していた細川周平氏らが中心になって、あちこちに呼びかけ、日本にもぜひその支部を樹立しようという話が進んだ。「じゃすぶむ通信」の発行や研究例会の開催など、わが国での草分け的な活動を続けている。

これより先に、「日常生活と音楽研究会」という学際的な研究集団も結成されている。一九八三年に、社会学の小川博司氏、サウンドスケープ研究の鳥越けい子氏らの呼びかけで始まったこの会は、以後一貫して、音楽学と社会学の境界領域を探るユニークな交流の場だった。数年後には関西「日音研」も活動を開始、毎月例会を開くなど着実な歩みを続けている。

IASPMの日本支部に参加したのは、最初、この研究会を通じて知り合った人びとが中心だった。しかし、いざ組織を動かしてみると、国際学会の「日本支部」では、制約が多くていかにも活動しづらいことがわかってきた。まず、予め決められている規約が、日本の実態にあわない。国際学会への「上納金」も相当な額を納めなければならないのに加え、得られるサービスは英語のものばかり。しかも、国際学会と切り離して「日本支部」だけに加入することは、認められていない。それならいっそ日本国内の学会を、別に作ったほうがいいだろう。

そこで、わが国ポピュラー音楽研究の草分けであり、第一人者でもある三井徹氏（金沢大学・IASPM日本支部会員）にお願いして、日本ポピュラー音楽学会（準備会）の設立を、呼びかけていただいた。それに応えて集まった同志が、はじめて会合をもったのが、冒頭に述べた大会というわけである。

予想を上回る、大勢の方々の参加をえたこの学会（準備会）だが、まごまごしているわけにはいかない。取り組むべき課題は山積している。どんなプランで仕事を進めていくのか、これまでの相談をまとめてみよう。

組織づくりと具体的なプランなど●

まず第一に、ポピュラー音楽研究は、とにかく多くの領域にまたがっている。音楽学ばかりでなく、社会学、心理学、人類学、文学、哲学、美学、伝統芸能の研究者。それに、愛好家や演奏家、音楽産業、放送・レコード業界の人びと、ファンクラブ等々、本来ならあまり接触のない人びとが一緒に参加できる組織づくりが大切だ。

第二に、ネットワークを拡げること。ポピュラー音楽の研究は、まだアカデミズムに認知されているわけではないから、大学や図書館にも資料が揃っていない。有力な人材も、ばらばらに散らばっている。ポピュラー音楽といっても、どんな分野に関心がある、といったようなことを、細かなデータにして共有することが、大切だ。そうしたら、同好の士が連絡をとりあって、いろいろな研究プランを発足させるのも容易になるだろう。

第三に、何と言っても、実績を積み重ねること。ディスコグラフィーや、ミュージシャンの伝記資料など、基礎的なデータが未整理なまま埋もれている。それをなるべく形にしよう。小さな学会だから、雑誌を出すのは当面無理としても、成果がまとまることに、随時ワーキング・ペーパーとして軽印刷するぐらいできるのではないか。その中から、本格的に出版できるものが出てくれば、それも嬉しい。

第四に、海外との交流。これはIASPM日本支部の役目かもしれないが、外国の研究者を招いたり、アジアの音楽事情を調査するなど、国際的な交流が欠かせない。日本のポピュラー音楽を、外国との関係抜きに語ることはできない。レコード、CDの売上げ高だけから見ても、日本はすでに世界有数の音楽大国なのだ。その責任を果たすことも大切である。

日本のポピュラー音楽研究は、まだ歴史が浅いとは言え、続々と興味ぶかい成果を生んでいる。古くは細川周平『ウォークマンの修辞学』、鳥越けい子他『波の記譜法』、中村とうよう『大衆音楽の真実』、朴燦鎬『韓国歌謡史』。最近では三井徹『ユー・アー・マイ・サンシャイン物語』、小川博司『音楽する社会』、渡辺裕『聴衆の誕生』、稲増龍夫『アイドル工学』、朝倉喬司『流行り唄の研究』、竹田青嗣『ニュー・ミュージックの美神たち』などなど。西洋の調性音楽の圏外、クラシックと演歌が共存する極東のこの国から、ポピュラー音楽研究の新しい風が吹き始めるのが、わが学会の願いである。

（はしづめ・だいさぶろう氏＝東京工業大学助教授・社会学専攻）

（連絡先〒152東京都目黒区大岡山二―一二―一　東京工業大学大岡山西四号館六〇三　橋爪研究室内　日本ポピュラー音楽学会準備会事務局）